



原点の色、到達点の色

# グレイスーツを 極める。

色が氾濫する現代にこそ、ストイックに映るグレイの力。  
光と影が素材上で織りなすグラデーションが、  
それを着る者のイマジネーションを刺激して止まない。  
「静寂」「気品」「知性」「洒脱」「威厳」。  
エレガンスを極めていけば俄然際立つ、グレイの存在感。  
グレイスーツの着こなしに、終わりはない。

Model Photograph / Makoto Nakagawa (K-Office)  
Still Photograph / Mitsugu Inada  
Hair & Make-up / Matsu Kaz (K-Office)  
Styling / Saori Kajitani  
Model / Troy, Merick  
Text / Natsuko Watanabe (P.32~37, 40~47)  
© Glove Photos / NANA通信  
© Richard Gillard / CAMERA PRESS / ORION PRESS



# 「グレイスーツの 迷宮」

なかのかおり●1962年生まれ。服飾史家。東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得後、1989年、1994年英国ケンブリッジ大学客員研究員に招かれ、現在東京大学非常勤講師。著書に「スーツの神話」(文春新書)、訳書「アン・ホランダール『性とスーツ』」(水社)、「ジャネット・ウォラク『シャネルスタイルと人生』」(文化出版局)。

諷刺の対象になるのも仕事のひとつであるかのよう  
な歴代英国王のなかで、おそらく描かれた諷刺画の数が  
もつとも少ない王のひとりに、ジョージ5世(英国  
王1910-36年)がいる。「人々に手本を示すのが  
自分の務め」という信念をもって健全で単調な生活ベ  
ースに固執し、堅苦しい服装の決まりを遵守しつづ  
けた。品位と威厳を備えた尊敬される国王として、諷刺  
画家につけいるスキを与えなかったようだ。

さて、黒派とグレイ派が長らくせめぎあっていたア  
スコット競馬場で、ついにグレイ・モーニングが優勢  
になったのは1935年のこと。ジョージ5世の晩年  
である。当時の人々の目で見れば、この現象は、「ア  
スコット競馬や夏の催しには、アンサンブルはすべて  
グレイで統一」(ケネス・ローズ『ジョージ5世』)と  
いうジョージ5世の服装典範の勝利にも見えたかもし  
れない。

ジョージ5世が夏の公式行事の色としてグレイにこ  
だわったのは、落ちついた明るさがスポーティーな社  
交服として最適という理由ばかりではおそらくない。  
キリスト教的なイメージの連想もあつたように思われ  
るのだ。つまり、グレイという色は、つがいの鳩の貞  
節さを連想させる美徳の色なのである。なんといつて  
も「人々の模範であらねば」との責任感にあふれた国  
王の選択である。浮かれがちな夏の社交に貞淑の美徳  
の色グレイ、というのは考え抜かれた組み合わせなの  
ではと深読みしたくなってくる。これは読みすぎとし  
ても、少なくとも、結婚式で花婿がグレイ・モーニ  
ングを着ることになっているのは、このような理由もあ  
るのではないかと思う。

キリスト教的な文脈とは無関係に、グレイが「使え

る色」であることに気がついた男性たちは、スポー  
ツ・シーンばかりでなく(19世紀の中頃からすでに、  
ピクニックやスポーツ用にグレイは用いられていた)、  
ビジネスの場でもグレイを着始める。1950  
年代にスローン・ウィルソンが「グレイ・フランネル  
を着た男」という小説を書き、それがグレゴリー・ペ  
ック主演で映画化される頃には、グレイ・フランネル  
のスーツといえばアメリカ的な株式会社文化の象徴に  
なった。「没個性」が美徳となるこのグレイ・スーツ  
が担う意味は、「中立・禁欲・放棄」(アト・ド・フリ  
ース『イメージ・シンボル事典』)というところだろ  
うか。その後日本でどぶねずみ呼ばわりされる羽目に  
なるグレイ・スーツも、この系統に属するだろう。

そんなグレイ・スーツは、80年代にいったん否定さ  
れ、マイケル・ダグラス演じるゴードン・ゲッコー  
『ウォール街』的な「欲望こそ善」という顔をした  
ネイビーのパワースーツに押されてしまうが、21世紀  
に入って、グレイ・スーツは再び脚光を浴びている。  
威圧感や攻撃性とは無縁な控えめな品の良さ、合わせ  
るシャツやタイの選択肢の広さ、黒いタートルネック  
をシャツの代用にすることも許してしまう寛容さ、そ  
うしたグレイの要素は、あらゆる価値と融和共存して  
いかねばならないこの時代が求めているものなのかも  
しれない。いずれにせよ、かつて「どぶねずみ」と蔑  
まれた「父の時代」のグレイ・スーツの否定の上に現  
在のグレイ・スーツがあることはまちがいない。あの  
ウィンザー公が、父であるジョージ5世の「生真面目  
で退屈なグレイ」の否定の上に「自由奔放なグレイ」  
の可能性を開かせたように。